

留学が中国人学生の文化的アイデンティティに与える影響に関する一考察 —— 中国人留学生と中国本国の学生との比較を通して ——

一二三 朋 子

問題と目的

問題の背景

異文化との接触は自分の文化的アイデンティティを強く意識せざるを得なくなる体験である。異文化と自文化との絶えざる比較にさらされ、それまで自明だったものへの疑問が生じる。異文化の人から自文化や自国の歴史などについて問われて答えられず、自分が生まれ育ってきた国や社会、文化とは何なのか、自分が〇〇人（例：日本人）であることはどういう意味を持つのかについて急速に疑問を感じるようになる。また、異文化に適応するため取る態度や行動により、本当の自分が失われるのではないかといった恐れ（巖岩、1986）や危機感が生じ、異文化と自文化との間で自分はどのような態度・行動を取ればいいのかという葛藤に苦しむ。

文化的アイデンティティとは社会的アイデンティティの一側面を表わす用語である。Tajfel（1978）は社会的集団への所属意識を社会的アイデンティティとして個人的アイデンティティと区別し、その所属意識が個々人に肯定的自己概念を与えたとした。社会的集団には国籍・民族・言語・宗教・文化・職業などがある。本研究では「〇〇人としての自分」「〇〇文化を担った自分」（例：日本人としての自分、日本文化を担った自分）のように、国や民族・言語など広く文化に関わる概念を文化的アイデンティティの準拠枠に含めることとする。文化的アイデンティティには、所属意識だけでなく、その集団への愛着や誇りといった感情的要素や、「〇〇文化を担った自分」とは何なのかといった疑問や関心、自文化に関する慣習や伝統の遵守などの行動的要素も含まれる。

Tajfel（1978）の社会的アイデンティティ理論によると、人は自分が所属する社会的集団（以下、内集団）を自己概念の源泉とし、内集団の成員であることを強く意識させられる場合には、自己概念の中の社会的アイデンティティが優勢になる。こうした状況下では、個々の成員の個人的特徴よりも集団の特徴

に沿った行動を取る。内集団の評判が低ければ、自己概念をポジティブに保つことが難しくなるので、内集団の評価や社会的アイデンティティを維持・高揚しようとする動機が高まり、内集団の仲間をひいきする内集団ひいきなどの現象が発生する。また、個人の内集団に対する同一視の程度が強いほど、こうした現象も強く発生するとされている（大石，2001）。

Karasawa（1991）は、日本の専門学校生を対象に、集団への同一視の低い者と高い者とを比較し、同一視の低い者は内集団への評価が低いと内集団を蔑むが、同一視の高い者はそうしないことを見出し、社会的アイデンティティ理論を検証している。

ところで、青年期の留学は文化的アイデンティティを先鋭化して意識させる体験であり（大野，1990）、日本で学ぶ外国人留学生の異文化適応を文化的アイデンティティの視点から研究する意義は大きいと思われる。Bochner（1972）は留学生の克服すべき課題の1つとして、自文化の代表者としての課題を挙げて、自文化に対する文化的アイデンティティ構築の重要性を示唆している（吉，2001）。また、鈴木・井上（1995）は異文化適応においては日本文化を受け容れるという課題だけでなく、自文化に根ざした文化的アイデンティティの修正・確立が重要であることを指摘し、井上・伊藤（1995）は自文化の維持と異文化の受容の双方を重視する態度としての統合（integration）が、来日1年目の留学生の異文化適応にとって最も望ましい状態であることを報告している。これらの研究は、留学生の異文化適応における自文化への文化的アイデンティティの重要性を裏付けるものといえよう。しかし、上で述べたように、文化的アイデンティティには様々な要素が含まれ、異文化適応に特に関連の深い要素はどのような要素なのかは不明である。

また、異文化接触には2つの側面が考えられる。異文化に関わる側面と、自文化に関わる側面である。前者は異文化に触れることで起きるカルチャーショックや異文化への適応に焦点が当てられている。後者は自文化の担い手であることに伴う体験に焦点が当てられる。例えば自文化をホスト社会の人に紹介したり、自文化について質問されたりするなどの体験である。そうした体験を通して自文化に対するホスト社会からの評価を知ることは、自文化を客観的に見ることにもつながる。留学生の異文化接触と文化的アイデンティティとの関係について、先の社会的アイデンティティ理論は当てはまるのだろうか。例えば、もし自文化がホスト社会の中で高く評価されていることを知れば文化的アイデンティティは強化されるのであろうか。逆に自文化がホスト社会の中で低く評

働かれていると認知したとき、文化的アイデンティティは強まるのであろうか、それとも弱まるのであろうか。このように自文化に関わる異文化接触が文化的アイデンティティにどのような影響を与えるのかを検討した研究は管見では殆ど見られない。

目的

そこで本研究では、日本の大学で勉強する中国人留学生を対象に、文化的アイデンティティと異文化適応との関係を明らかにすることを目的とし、次の3点を検討する。

- ① 自文化に対するホスト社会（日本人）の評価は文化的アイデンティティにどのような影響を与えるのか。
- ② 文化的アイデンティティは自文化の保持及び異文化の受容にどのような影響を与えるのか。
- ③ 文化的アイデンティティは異文化適応にどのような影響を与えるのか。

上の3点を検討するために、本研究では相互の概念の間に因果関係を仮定する。先ず、日本人との交友関係を通して、留学生たちは自文化が日本人にどのように評価されているかを直接知ることが予想される。そして日本人の自文化（中国文化）に対する評価によって自文化への文化的アイデンティティは何らかの影響を受けると考えられる。そしてその文化的アイデンティティの持ち方により、自文化を強く保持するか否か、異文化(日本文化)を受容するか否か、という自文化・異文化への態度が影響を受けるであろう。さらに、自文化・異文化への態度の取り方により、日本社会への適応感が変化する。以上の関係を表わしたのが FIGURE 1 の因果モデルである。

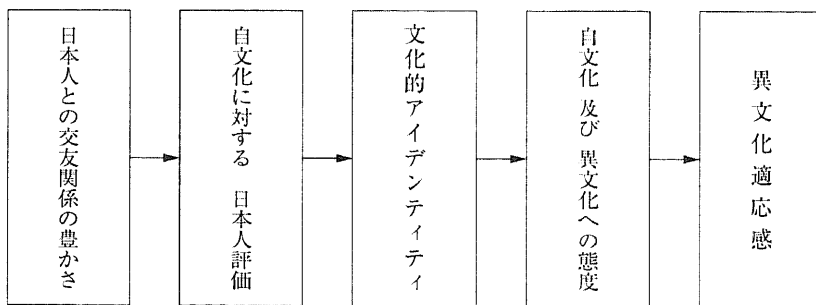


FIGURE 1 文化的アイデンティティと異文化適応感の因果モデル

方 法

被調査者

日本の大学（10大学）で学ぶ中国人留学生（以下、留学生）215名から協力を得たが、今回は漢民族である者に限定した結果、留学生166名（男性74名、女性92名、平均年齢24.1歳、平均滞日期間25.2ヶ月）が分析対象となった。

質問紙構成

本研究では以下の質問項目を用いて分析を試みる。

- 1) 日本人との交友関係の豊かさ 5項目
- 2) 自文化に対する日本人の評価の認知 12項目
- 3) 文化的アイデンティティ 17項目
- 4) 自文化及び異文化への態度 9項目
- 5) 異文化適応感 25項目

1) 2) については山崎他（1997）から、日本人との交友関係及び、日本人による自エスニシティへの関心・好意の認知を測定する項目を参考にした。

3) については民族的アイデンティティを①国・民族・文化への所属意識、②国・民族・文化に対する誇りや愛着、③国・民族・文化への興味や関心という3つの側面から捉えている Phinney（1992）の Multigroup Ethnic Identity Measure（以下、MEIM）を参考にした。

4) については井上・伊藤（1995）を参考に、日本文化の受容や日本社会への関わりを求める態度・行動と、中国の生活習慣などを保持しようとする態度・行動に関する質問項目を独自に作成した。

5) は外的適応感と内的適応感の2側面から異文化適応感を捉えることとした。外的適応感とは、学業面や人間関係に関する充実感・習熟感に関するもので、内的適応感とは、異文化の中での自分をどの程度受容できているかを意味し、「自分はこれでいい」という自分への肯定感や有能感・自信を伴う。外的適応感とは上原（1988）の在日留学生適応尺度と吉（2001）の適応感尺度を参考にし、内的適応感とは山本・松井・山成（1982）の自尊感情尺度（堀・山本，2001）を参考にした。

回答は全て5段階評定である。

調査時期

質問紙の配布・回収時期は2006年4月から10月までである。

分析

まず、各概念の構造を検討するために、質問紙の1)～5)について固有値1.0以上とした因子分析(主因子法、バリマックス回転)を行なう。次に、各因子を構成する項目を観測変数として、FIGURE 1の妥当性を共分散構造分析により検討する。

結 果

各構成概念の構造

因子分析の結果は以下の通りである。

「日本人との交友関係の豊かさ」に関しては、1元性が確認され、「日本人友人の豊かさ」と命名した(TABLE 1)。

TABLE 1 日本人との交友関係の豊かさ

	日本人友人の豊かさ
X1 <u>一緒に遊ぶ日本人友人がいる</u>	.874
X2 <u>個人的に相談できる日本人友人がいる</u>	.783
X3 <u>日本語や勉強の助言をしてくれる日本人友人がいる</u>	.751
日本人との友人関係に満足している	.671
帰国後もつきあいたい日本人友人がいる	.541

「自文化に対する日本人の評価の認知」に関しては2因子が抽出され、それぞれ、「自文化に対する日本人の差別・偏見の認知(以下、差別・認知)」と「自文化に対する日本人の関心・期待の認知(以下、関心・期待)」と命名した(TABLE 2)。

「文化的アイデンティティ」に関しては3因子が抽出された。中国の伝統文化や歴史・言語を大切にしようとする「自文化の継承(以下、継承)」、中国人・中国文化への誇りや愛着を感じる「自文化への愛着(以下、愛着)」、中国の文化や歴史を学んだり自分が中国人であることの意味を内省・探索する「文化的アイデンティティの探索(以下、探索)」と解釈・命名した(TABLE 3)。

「自文化・異文化への態度」については3因子が抽出され、「異文化の積極

的受容（以下、積極的受容）」「異文化の消極的受容（以下、消極的受容）」「自文化の保持（以下、自文化保持）」と命名した（TABLE 4）。

TABLE 2 自文化に対する日本人の評価

	差別・偏見	関心・期待
X 4 <u>日本人は中国人をばかにしている</u>	.774	-.142
X 5 <u>日本人は中国に対する差別意識が強い</u>	.707	.082
X 6 <u>日本人は中国人を悪人・犯罪者のように思っている</u>	.585	.084
日本人は中国の伝統や文化を低く評価している	.538	-.072
日本人は中国の経済力を低く評価している	.486	-.079
日本人は中国の歴史に無知である	.367	-.209
日本人は中国人に対して好意的な感情を抱いている	-.287	.265
X 7 <u>日本人は中国の歴史に関心を持っている</u>	-.188	.735
X 8 <u>日本人は中国の伝統や文化に関心を持っている</u>	-.003	.696
X 9 <u>日本人は中国の政治・経済に関心を持っている</u>	.100	.604
日本人は中国の将来に関心を持ち期待している	-.015	.551
日本人は中国の習慣や考え方を理解・尊重してくれる	-.224	.511

TABLE 3 文化的アイデンティティ

	継承	愛着	探索
X10 <u>自分の子どもに中国の言語伝統・文化・を継承したい</u>	.849	.204	.200
X11 <u>自分の子どもにや歴史や伝統文化をしっかりと教えたい</u>	.800	.247	.289
X12 <u>自分の子どもが中国人としての誇りを持つことを望む</u>	.659	.502	.196
私にとって中国語はとても大切な言語である	.530	.287	.213
中国の伝統・文化を大切に感じる	.503	.266	.192
X13 <u>中国文化・中国人であることをすばらしいと感じる</u>	.374	.666	.217
X14 <u>中国人であることを幸せに思う</u>	.360	.635	.318
X15 <u>中国・中国人に強い愛着を感じる</u>	.277	.626	.234
中国の文化や中国人であることに誇りを感じる	.372	.553	.425
中国人であることが人生に果たす役割がわからない	-.087	-.230	.052
X16 <u>中国の文化・歴史を学ぶために努力したい</u>	.286	.197	.624

X17 中国の歴史や伝統・習慣について勉強する	.124	-.147	.585
X18 他国との関係から見て中国人であることの意味を理解している	.206	.379	.557
中国・中国人に対する帰属意識が強い	.173	.439	.554
中国人であることの意味を理解している	.167	.493	.517
中国のことをもっと知るために他の中国人から話を聞く	.232	.055	.512
中国人であることが人生に与える影響について考える	.038	-.173	.277

TABLE 4 自文化・異文化への態度

	積極的受容	消極的受容	自文化保持
X19 日本の文化や習慣を積極的に取り入れたい	.772	-.171	-.071
X20 日本の伝統行事などに積極的に参加したい	.591	.037	.004
X21 サークルなどに入って日本人との交流を深めたい	.471	.130	.071
仕方なく日本の習慣や伝統に従っている	-.407	.402	.244
仕方なく日本人の考え方・行動に合わせている	-.067	.703	.136
差別回避のために日本人と同じように行動している	.131	.645	.093
X22 中国の生活習慣や年中行事を守っている	.143	.034	.746
X23 中国での生活習慣屋行動を貫く	-.010	.211	.651
日本人と同じように行動しようとは思わない	-.188	.076	.257

「異文化適応感」に関しては4因子が抽出された。外的適応感としては、勉強に集中し、やりがいを感じる「学業充実感」、日本人の考え方やコミュニケーションの取り方に慣れてきたと感じる「対人関係習熟感」の2因子が抽出された。内的適応感としては、自分は有能で役に立つ人間だと感じる「自己有能感」、自分はこれでいいと感じる「自己肯定感」が抽出された（TABLE 5）。

TABLE 5 異文化適応感

	自己 有能感	学業 充実感	対人関係 習熟感	自己 肯定感
<u>X24R</u> 私は敗北者だと思ふことがよくある	-.784	-.014	-.028	-.090
<u>X25R</u> 私はいつも自分が役に立たない人間だと思ふ	-.773	-.088	.074	-.043
私は物事を人と同じくらいにはうまくやれる	.636	.006	.134	.214
<u>X26</u> 私はいろいろな良い素質を持っている	.631	.197	.046	.286
私には自慢できるところがあまりない	-.495	-.121	-.049	-.058
私は全くだめな人間だと思ふことがある	-.457	-.051	-.061	.137
何でも話せる友人がいる	.328	-.000	.234	-.032
私は自分自身を尊敬できるようになりたい	.241	.079	.167	.025
<u>X27</u> 自分の大学がとても好きである	-.071	.783	.050	.105
<u>X28</u> 大学での勉強に集中できる	.068	.748	.077	.091
<u>X29</u> 大学の先生に気軽に相談できる	.169	.565	.176	-.062
大学での勉強にやりがいを感じる	.200	.462	.042	.082
<u>X30</u> 日本人の考え方が理解できる	.137	.084	.712	-.000
<u>X31</u> 大学の事務の人たちに気軽に声をかけられる	.120	.179	.510	.127
<u>X32</u> 日本人とのコミュニケーションに困らない	.030	.078	.474	.189
日本人と同じように行動できる	.364	.113	.465	-.066
中国人に対する日本人の態度に慣れてきた	-.048	-.021	.337	.087
<u>X33</u> 私は自分はこれでいいと思ふ	.097	-.018	.132	.756
<u>X34</u> 私は自分に満足している	-.080	.140	.189	.719
私は他の人と同じくらい価値ある人間である	.229	.088	.057	.386

Rは逆転項目である。

因果モデルの妥当性の検討

あらかじめ設定した因果モデルの妥当性を、共分散構造分析により検討した。統計パッケージはAmos 5を使用した。因果モデルの検討に用いる構成概念の観測変数には、因子分析の因子負荷量が高く、かつ影響指標が高いものを用いた。TABLE 1～TABLE 5内の下線を付したものが観測変数である。

適合度指標が最も高くなるようにパスを調整し、最終的に得られたパス・ダ

イアグラムを FIGURE 2 に示す (図中の観測変数 X_n は TABLE 1 ~ TABLE 5 の X_n と対応している)。適合度指標は $CFI = .824$, $PCFI = .743$, $RMSEA = .064$ であり, まあまあの適合であると判断した。また, 構成概念から観測変数への影響指標は .40 ~ .88 であり, 適切に対応しているといえよう。パス係数は有意または有意傾向のものであり, 標準化されたものを示してある。

考 察

本研究の目的である, ホスト社会の評価が文化的アイデンティティにどのような影響を与えるのか, 文化的アイデンティティによって, 自文化及び異文化に対する態度はどう変化するのか, さらに, 自文化及び異文化に対する態度が異文化適応にどのような影響を及ぼすのかを考察する。

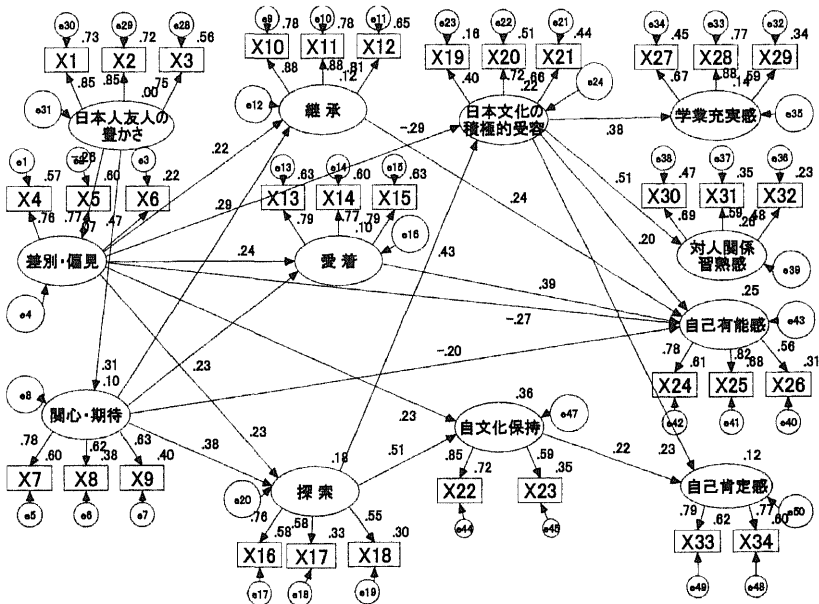


FIGURE 2 文化的アイデンティティと異文化適応感

FIGURE 2 より, 「日本人友人の豊かさ」から, 中国・中国人に対する日本人の「差別・偏見」には負のパス, 「関心・期待」に正のパスが認められる。

日本人との良好な交友関係により、日本人が中国に対して差別や偏見を持っていないとの認識を深めると同時に、日本人が中国に対して関心を持っており、理解しようとしているとの認識をも深めることがわかる。このことは、留学生にとって、日本人友人は日本社会を知るための重要な役割を示すものといえよう。

次に、中国・中国人に対する日本人の「差別・偏見」と「関心・期待」のどちらも文化的アイデンティティの構成要素である「継承」「愛着」「探索」の全てに正のパスが認められた。肯定的評価であれ否定的評価であれ、自国に対する日本人の評価を認知することで、文化的アイデンティティが強められることが推察される。自国・自文化に対する肯定的評価が自文化への愛着や誇りなどの文化的アイデンティティを高めることは想像に難くないが、自国のことを低く評価された場合でも、自文化への文化的アイデンティティは弱くなるどころか、反対に強められるということは注目に値する。民族的アイデンティティに関する研究の中には、社会的地位が低い民族に所属することを隠したり、社会的地位が低い民族に所属するために自尊感情が低くなるなどの報告が見られる。今回の中国人留学生の場合は、ホスト社会の偏見・蔑視に抗するかのようにより文化的アイデンティティを高めるのである。逆に言えば、ホスト社会の偏見・蔑視に押しつぶされないためには文化的アイデンティティを強く持つことが必要なのかもしれない。

次に、文化的アイデンティティのうち、「継承」「愛着」は自文化・異文化に対する態度に影響を与えないが、「探索」は「日本文化の積極的受容」にも「自文化保持」にも正の影響を与えている。「継承」「愛着」はどちらも文化的アイデンティティの感情的側面といえよう。そうした感情的要素は、自文化と異文化との狭間であって自らの態度を変えることにはつながらないことがわかる。これに対し「探索」は自らの文化的アイデンティティの意味を問い直したり、その根源を模索・探求する知的側面である。こうした知的活動は、行動面の変化をも促すと考えられる。言い換えれば、文化的アイデンティティの感情面での強さは行動への変化をもたらしにくいだが、知的活動を伴う文化的アイデンティティは、行動面での柔軟な変化をもたらすといえよう。自分の文化的アイデンティティの根源を探求することは、自文化の歴史だけでなく、他国との関係の歴史を知ることにもつながる。そうした知的活動は自文化・自民族中心的視点からの脱却を促進し、異文化の積極的受容をも活性化することが推察される。

さらに、自文化・異文化への態度について、「日本文化の積極的受容」は、

外的適応感及び内的適応感のいずれにも正の影響を与えている。日本文化の申にあって日本の習慣を意欲的に受け容れ、日本人との交流の機会も積極的に求めているこうとする態度は、学業や日常生活への適応を順調に進め、円滑な人間関係やコミュニケーションを可能にし、自分の有能感を高めるのに非常に有効であることがわかる。

一方、「自文化保持」は「自己肯定感」に寄与することも示されている。異国にあっても自分の文化的アイデンティティの根源である自文化を尊び大切に守ろうとすることは、外的適応感には結びつかないものの、自分が中国人であることの肯定感や自己受容感を高め、安定した精神状態を保つために重要な役割を果たすと考えられる。

以上の結果より、日本文化の積極的受容と自文化の保持の態度は、異文化適応感を補強しあうものであることが示された。これは、自文化・異文化双方を重視する統合の態度が異文化適応にとって最も望ましいという井上・伊藤（1995）の報告を裏付けるものといえよう。

その他、因果モデルでは仮定されていなかったパスについて見ていく。日本人による「差別・偏見」から「日本文化の積極的受容」に負のパス、「自文化保持」に正のパスが認められた。日本人が中国に対して差別的であると感じることは、日本文化を積極的に受容する態度を硬化させ、頑なに自文化を保持しようとする態度を強めることが推察される。また、「自己有能感」に対して「継承」「愛着」から正のパス、日本人による「差別・偏見」「関心・期待」から負のパスが認められた。自文化へのアイデンティティを強く持つことで自尊心や自信が強まることがわかる。一方、日本人からの差別的視線は彼らの自信を傷つけることが推測される。ここで、日本人による関心や期待もまた、彼らの自信を損なうことが示されたのは意外な結果であった。日本人による関心・期待は自文化へのアイデンティティを経て有能感を高めるものの、直接的には彼らの有能感を低めている。日本人から寄せられる関心や期待に自分が十分に答えていない、或いは値しないという気持ちが、自己有能感を低下させているのだろうか。このことについては今後の調査で明らかにしていきたい。

留学生と中国本国の学生との比較

最後に、留学が与える影響を明らかにするために、中国人留学生と中国本国の中国人大学生とを比較してみたい。

中国に対する日本人の評価の認知と文化的アイデンティティ及び自尊感情に

ついて、中国本国の大学（3大学）で学ぶ中国人大学生149名（男性34名、女性114名、不明1名、平均年齢22.2歳）を対象に、留学生と同様の項目で質問紙調査を行なった（2006年10月～12月に実施）。留学生と本国学生とを込みにした集計結果を元に因子分析を行なったところ、留学生だけで行なった因子分析結果とほぼ同様の因子構造であることが確認された。そこで、留学生と本国学生とを込みにした因子分析結果から、因子負荷量が.40以上のものを尺度項目として各尺度のクロンバックの α 係数を求めたところ、.62～.87であり、十分な内的整合性を有することが確認された。各尺度の構成項目の合計得点を項目数で除したものを尺度得点とし、留学生と本国学生についてt検定を行なった（TABLE 6）。

TABLE 6 各尺度の平均値・標準偏差・t検定結果

	留学生 (n=166)	本国学生 (n=149)	t 値
差別・偏見 ($\alpha = .73$)	2.80 (.61)	2.73 (.60)	1.02 ns
関心・期待 ($\alpha = .69$)	2.96 (.69)	2.93 (.58)	.39 ns
継承 ($\alpha = .88$)	4.51 (.66)	4.65 (.53)	-2.04 *
愛着 ($\alpha = .88$)	4.29 (.74)	4.51 (.64)	-2.76 **
探索 ($\alpha = .79$)	3.72 (.69)	3.91 (.64)	-2.48 *
自己有能感 ($\alpha = .78$)	3.74 (.68)	3.96 (.60)	-3.06 **
自己肯定感 ($\alpha = .72$)	2.98 (.96)	2.89 (.94)	.85 ns

() 内は標準偏差 * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

TABLE 6より、「差別・偏見」「関心・期待」のいずれも、留学生と本国学生との間に有意差は見られなかった。日本人の中国に対する評価の認知は、留学したからといって変化しないことが示されている。本国にいてもメディアなどからの豊富な情報により、日本人の中国に対する評価については一定の認知が形成され、留学してもそれらの認知が覆されることはないことがわかる。日本人との交流を通して、本国で想像していたより差別的でもなく、また好意的でもない認知することが推察される。

次に、「継承」「愛着」「探索」についてはいずれも本国学生のほうが留学生よりも有意に高かった。本国学生よりも留学生のほうが自文化への愛着や探索

が低いことについては幾つかの理由が推測される。1つめは、異文化と接触することで自文化を相対的に評価する視点が養われた可能性である。外から自文化と異文化を客観的に比較した結果、留学前に高かった自文化への評価が低く修正され、自文化への誇りや興味を低下させたことが考えられる。2つめは、もともと自文化への愛着・興味が低かったという可能性である。最近急増してきた中国人留学生の留学動機の背景には、本国での大学受験の失敗や、本国での就職への不安などがあるといわれる。留学の動機が本国での生活に対する何らかの不満や失望感とするならば、留学生たちの文化的アイデンティティが初めから低かったということは十分に考えられよう。

「自己有能感」について、本国学生のほうが留学生よりも有意に高かった。日本での生活・学業・人間関係などの様々な面での挫折や辛い体験が自信を喪失させ、無力感を生む原因となっていることが1つの原因と考えられるが、今回の調査では確かなことは不明である。自信低下の原因を究明することが必要であろう。今後の課題としたい。

まとめ

教育的示唆 本研究では、中国人留学生の文化的アイデンティティについて、留学という異文化体験が文化的アイデンティティに与える影響を検討した。本研究の結果から、留学生の文化的アイデンティティに関して次のような示唆が得られよう。

第1に、日本人との交友関係の重要性である。留学生が日本を理解するための窓口として、日本人友人の果たす役割は非常に大きいことが示された。日本人の友人が豊かであればあるほど、日本人が中国に対して関心や期待を持っているとの感を強め、そのことが文化的アイデンティティ強化につながり、ひいては留学生生活の適応感を高めることにつながるのである。

第2に、自分の文化的アイデンティティを探索することの重要性である。本研究の結果から、自分の文化的アイデンティティの根源を真剣に内省・模索することが、異文化を積極的に受容する態度と自文化を大切にしようとする2つの態度にとって有効であること、そして、その2つの態度は共に外的適応感・内的適応感を補完しながら影響を与えていることが明らかにされた。つまり、異文化の中で自分の文化的アイデンティティを探索することは、自国・自文化に固執した閉鎖的態度を培うのではなく、逆に、異文化に対し寛容な態度を養

い、さらには順調な異文化適応を促すことにつながるといえる。

第3に、異文化にあっては異文化を積極的に受容しようとする態度と、自文化を大切にしようとする態度という2つの態度が相俟って、異文化での適応感を補完することが明らかになった。井上・伊藤(1995)での *integration* の態度が異文化適応において最も望ましい状態であることを裏付けるものである。

以上の示唆は留学生に対してだけでなく、留学生を受け容れるホスト国の側にとっても重要な意味を持つ。自国にいと自分の文化的アイデンティティを真剣に模索する機会は少なく、全く無意識の状態にあるといっても過言ではない。そして自分の文化的アイデンティティに無意識・無関心であるということは、相手の文化的アイデンティティにも無頓着である可能性も否めない。ホスト国側は留学生の文化的アイデンティティに対する繊細さと同時に、自らの文化的アイデンティティに対する感受性も豊かにすることが求められよう。ホスト国側が意識的に留学生たちの異文化を認め支援することが、今後も求められよう。

また、自文化を理解するためには異文化を理解することが不可欠である。自文化に対する相対的視点を持つことや異文化を正しく理解しようとする態度により、異文化への偏見が是正され、さらには異文化への寛容な態度が養われるのである。自文化に関する深い内省や模索は自文化の理解を深めるだけでなく、異文化に対する認識や態度にも肯定的な影響を与えることが示唆される。

今後の課題 本研究では中国人留学生の文化的アイデンティティが留学によってどのように変化するかを検討するために、本国学生との比較を行なったが、時間的変化をより正確に把握するためには、同一の被調査者の縦断的調査が必要であろう。また、今回は漢民族の中国人留学生だけを対象としたが、今後は他の国・文化・民族に属する留学生についても調査を行ないたい。以上の2点が今後の課題である。

参考文献

- Bochner, S. 1972 Problems in culture learning. In S. Bochner & P. Wicks (Eds.), *Overseas Students in Australia*. New South Wales: New South Wales University Press.
- 早矢仕彩子 1997 外国人就学生生の自己認知、自・他文化への態度が適応感に及ぼす影響 心理学研究, 68, 346-354.
- 一二三朋子 2006 異文化接触と親の教育方針がエスニック・アイデンティティ及

び自尊心に与える影響 —— 日本人学生と中国人留学生の場合 —— 文藝
言語研究言語篇, 49, 61-81.

- 堀洋道・山本真理子(編) 2001心理測定尺度集Ⅰ サイエンス社
堀洋道・吉田富士雄(編) 2001心理測定尺度集Ⅱ サイエンス社
巖谷ナオミ 1986 メタ的な生き方のすすめ 青年と医学, 34, 51-56.
井上孝代・伊藤武彦 1995 来日一年目の留学生の異文化適応と健康 —— 質問紙調
査と異文化間カウンセリングの事例から —— 異文化間教育, 9, 128-142.
吉元洪 1999 中国人留学生のピリーフ・システムと学習態度・意欲が異文化適応
に与える影響 学生相談研究, 20, 143-152.
吉元洪 2001 在中日本人留学生の異文化適応に関する研究 —— ピリーフ・システ
ムと自我同一性の観点から —— 広島国際研究, 7, 183-199.
Karasawa, M. 1991 Toward an assessment of social identity: The structure of
group identification and its effects on in-group evaluations. *British Jour-
nal of Social Psychology*, 30, 293-307.
大野裕 1990 若者の留学体験 青年心理, 84, 45-49.
Phinney, J. S. 1989 Stages of ethnic identity development in minority group ado-
lescents. *Journal of Early Adolescence*, 9, 34-49.
Phinney, J. S. 1991 Ethnic identity and self-esteem: A review and integration.
Hispanic Journal of Behavioral Science, 13, 193-208.
Phinney, J. S. 1992 The Multigroup Ethnic Identity Measure: A new scale for use
with diverse groups. *Journal of Adolescent Research*, 7, 156-176.
周玉慧 1995 受け取ったサポートと適応に関する因果モデルの検討 —— 在日中国
系留学生を対象として —— 心理学研究, 66, 33-40.
鈴木康明・井上孝代 1995 異文化間カウンセリング 渡辺文夫(編) 異文化接
触の心理学 川島書店 Pp. 159-168.
Tajfel, H. (Ed.) 1978 Differentiation between social groups: Students in the social
Psychology of intergroup relations. London: Academic Press.
田中共子 2000 留学生のソーシャル・ネットワークとソーシャル・スキル ナカ
ニシヤ出版
鎌幹八郎・宮下一博・岡本祐子(編) 1997 アイデンティティ研究の展望Ⅳ ナカ
ニシヤ出版
上原麻子 1988 留学生の異文化適応 広島大学教育学部日本語教育学科・留学生
日本語教育, 111-124.
山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心
理学研究, 30, 64-68.
山崎瑞紀・平直樹・中村俊哉・横山剛 1997 アジア系留学生の対日態度及び対異
文化態度形成におけるエスニシティの役割 教育心理学研究, 45, 119-128.